



9
8
7
6
5
4
3
2
1
90
80
70
60
50
40
30
20
10
1
2
3
4
5
6
7
8
9
100

尾張迺家包二

新古今集

秋哥上

文治六年女御入内屏風

後徳大寺左大納言



ほしき簾のほとりゆくよきのようう山ちゆの匂
すの匂のものやきうきうふとひうわくと

百首奇の中

か陵抱月

さのふねよとくらむすいは圓の生田の社よ秋ハ早よとくら
本歌天す方とと歸めをほ圓のどよみ。何な
里の秋の物れ。うき。何な

かきのふはよとくしわむへよんと余先生本歌よ
ももよよもてくのやと解き風をひき哥子とも例をたえられ
たがいよ本歌よ天さるくとくゆゑとあるその人のすこねとえ
とせりきのがたよと立秋の日のらうした何とそき夏の日よとく
全をやむいて秋ハ朱ねあまハ翠ねわのれぐもふれぬ必ずふ下とくとく
うのすを何からくとくうくうけりするもの寄よはーとく賀吾
のさへすととくれだつてあじうめ下うと府の人松床の四季の頃よ
达摩と高賀翁捨此のをとし歓人
セミノミス様うおがきをせまき幸

最勝四天王院障子よおみうきだる而

秀能

吹き方の色よとくしむかみのよとくよ秋ハあまう
上二弓林木ぬめよけやよとくねとしのきよ
風ハ毛比よとくねとくと本歌ようだくすとてお
哥子川井下しとくとくとくとく

百首歌より一叶 復成つ

伏見山ねのかきよとくと段せよあす山閣よ秋うひりとく
ねのすけあはとくとくとくとくとくとくとくとくとく

百首歌より五十五首

衣復明居

ゆめうう衣よ室一夏至高や伏見の里せ秋のモリ風
あよよよよよてあうきをもくをくうくうくうくうく
歌委くいよよぬううといへつかの秋ハ夜のゆて

秋の匂風のくらべ林の匂風へうらうらせばた
トうなずす。秋の匂風とくらべ。匂風のひやうをもてゆきへと。春
夜はあれど林をうそらえそねて。あめむれのひやうをもゆかづ
まとどはま夜はゆきや。草木の休みあはれの林のくらべもゆかづ
ゆきへと。三月みにてされとやのゆきや。のうちも
つけてくらべ。さりとやのゆきや。のうちも
なり。おうきはげばれをかくいさくもゆかづ
なり。さくさくえなをげ後流があすゆぢや。

千五百番歌合

撰改

深あゆのあゆすと井いと雪をひけ付林、木よくり
物々、雪の名よゆきやのひをゑうち二句、とどくよりふ
そよぎを林のもりむとどくのゆきよしとてはむの
よすとふは、たよひ人のたをがくじと元のすめとて

たよしや、けだよきなどもあゆのうきや、とくよきだよ
ハ縁やり、井い契約はてせ二二句、あとよすりて
くもくちきりしてとよじてきたねをよすと
とをとくわらのせとりよだらきり枝や、のせり
井い契約をたよりんう寄、うもる桂園、いづへきゆうひや、井い
たよりゆうひやとよれむよけあとすえあくすめによ、井い
とよれむよけあとすえあくすめによけあとすえあくすめによ
桂たよ。井い契約を二義をあらひゆのまよすたよへあすと
のゆきハ、你のまよの叶ゆき西を、いざみの而縁をよむれす、契約あくす
のゆき。おもむきもむきもむきもむきもむきもむきもむきもむきもむきも
てゆきとぞくらべてさゆとくまんゆをくね、まくのゆき
まくのゆきとぞくらべてさゆとくまんゆをくね、まくのゆき

あくれば、いよいよのとこゆめがせらるる風よ。秋も年もあ
又といふもよひて、むかし神のあたきを、あたま。ま
まうきぐす。一きのとがせ原の鳥と林風たとえ、人とのまほろき。
てはうつゆめのまことえいよたてのとんとつらうもん。入は信よひるモホ
や。せあくしよ本とんがくわゆ。ちくあらとせんはせりふだ
せ。ハ用さむかとあむゆ。

具親

あめのれの、不遇ぬすり鳥を尋ね、杖のもうれ
済はわれたるのあくつよ。秋の物風のゆゑもとを。
鳥を尋ねると、いはすく。と鳥は林のよすうお
と。尋ねまつりや。ふと、不遇ぬすりばく吹
くもさすまきと、あはるがす。などとよすて。
ふとくわからぬと、いはすく。不遇ぬすりばく、
不とくわからぬと、いはすく。不遇ぬすりばく、

うねつづく。そきゆくはたはまやうまきてちにん
ゆゑあむとだひだす。草ねもとくきく詩へばくつすきのとく
寄はからづきくや。と遇へいふねづり。すくあるものよき
よきとす。

顕昭

水奈れ園の葛原ともづきくよ。秋の物風
上々方祭十。水くきの園のすくともづきくよ。り。
万葉集より。秋風のひよくよ。火事のもの森とよけよ。あ
とあり。あそびの深すり。あそびを葛原よ。えだり。古風をよ
はり。いふくよ。とく。はね拾遺秋上。よ。葛原玉。よ。葛
のう。風のう。がく。る。秋がよ。う。木屋を嘗余よ。う。じ
え。古風よ。う。葛の縁のう。がく。う。木屋を嘗余よ。う。じ
え。古風よ。う。葛の縁のう。がく。う。木屋を嘗余よ。う。じ

越前

秋のたんよりやくもかを袖のやうとむすりひらば
に匂よ袖とりくもと二三の匂のひたりゆがふあ
後たちまち生てせ。二匂よ袖うとりへるも。四匂の袖
の外もあはれのあらわきをすせし。やうの
あはれをさきこらひゆく。たれなやもあられと流まひ
ときまくされ。いとむかへはるハ行ひの家路をとて後の人をふ
きまつり。ある家のことを袖の外とりくもとせ。後の人をふ
二三の匂のひたり。近がハ後たるもをすせえ。ハげもあす。トクモ袖とりくもと
しんぐす。かのじがとしこて後の人りとひいてうきよえらん。あるらよ
け合ふかずをさくられと。上の匂ふあとどりゆく袖。ふくらの
本後のまことじあを便りて。歌人をさしすすめぐくうだまく
ときのうらへ。首のまこと秋のかとみの一きハだゆせふか
お

袖の

立浪かぬせ。いして。たどと不道。但の字のまくら。秋かむち
一とふがす。もと。立浪のまくらとのまくらの事と。立浪
もと。立浪のまくら。立浪のまくらの事と。立浪
れで。はせす。立浪のまくら。字の義。俗よするとも。きのまくら。秋か
く。立浪のまくら。立浪のまくら。立浪のまくら。
後携難。あくまく立浪。立浪のまくら。立浪のまくら。
袖すら。あくまく立浪。立浪のまくら。立浪のまくら。

袖の
立浪かぬせ。

五十首歌序 内秋の井雅經

きのまくら。立浪のまくら。秋かむち
二三の匂。立浪のまくら。立浪のまくら。
一匂の風うち。下り。立浪のまくら。立浪のまくら。
きて。立浪のまくら。立浪のまくら。立浪のまくら。

よくすむへと

題一寺

西行

あくへりよあらのあはくわづれ秋風から草のる
秋風のあはくよまきてあらゆをむかひる。物
匂まつてあらゆのあくちくいづくさす下。
四五二二三とつ
きてくさす

崇徳院立嘗御前府後朱肺

みづきよ山田じひととて又神ぬと秋ハ年まろ
が秋。あ祭ハ、年まろ。づも傳恩を川夜引
すかねす。夏火流つきて神ぬれと桂田より

とて林も又あよ神ぬとど。川夜ともも因のう
きの夜のう。山田じひととて又神ぬと秋ハ年まろ
が秋。あ祭ハ、年まろ。づも傳恩を川夜引
すかねす。夏火流つきて神ぬれと桂田より
あへれれ。さればおおづく。寄よ月をす。手
袖ぬれとようとき酒をれし。あの中が川夜もあら
守。えひのけはなはあり。本歌の詞をち。中歌の詞を。は
てん。またき行もいじ。本歌の詞をち。中歌の詞を。は

、夕やれく秋の葉。しきをあらぬよそぞく。後藤守
ニタ。秋の葉を念向とぞく。りざりのうと
めつら。ことてもく。何のかくふとく。

題一寺

後徳大寺さ大臣

崇德院の百首歌集

後半つ

秋の風す
昇あわてや林風のあつねしきそろひ是
ゆふかくとしゆきをもとへる林風の秋の聲
もあつてそよぐ昇あわての事ゆふまな
れどもの花らきわは俗よほほ國縁
あらまく今お縁がああればほほとよめ
あらよ縁とよきとよりすくはよめとよめ
よめかねすよめとよめとよめでじよめとよめ
れちづまぢよめとよめと夫ぬとよめとよめ
そよがあせの縁うあれがくいとよめとよめと
てう林風うもつじよめとよめとよめとよめ
つまとよめとよめとよめとよめとよめとよめ

題

七條院權大夫

林風すねにせしよせきりすす秋のうるゑす
えすすは俗よあよしとふきと俗よきうるゑと
キセキすすはきと秋のうるゑ風のうとふ
てもすすだ風のうすす林風すらせらじをわ
ゆうとし引とへそ眼とすとめにけまのうるゑ
う

百首歌

或るの歌

うだわよむ初冬の神ようつこすす扇の林のうつ風
この上部ではすくすくすすすあくすすと不審ながくまく
て扇をすくすくすくすくすく扇のうるゑとくさく
いふく常をもこそのうへとすくすくすくすくすく
うたねのれの袖よめう風とくわくとくわくとくわくとくわく

たすくの歌とて 俊成つ

相模の山あらる山のうの宿ふ葉林うちの玉
初二句へ頬のまをするも序としはばんとだに
の露の玉も花の象徴ありとど小料のうち後拾
速集天川をくわひのうの宿すれりすと有
うの本と紙すくあへ然かとふあはそすめれん。横波と横葉
もふらをあせらるかとく紙のきがくらむがおれをよしりんと
百首哥子コ　或より教コ

、そよじねとよすと天の天の川原は木の夕とし
をしれと表すと。天の
川の木の夕とれりやあ風と。

入道有闇角改メハ

、いづきおとしやくみほのあまくいの天の川風

、たまのとひてあまくい天の川風とすけりと。

セタのうを

公經卿

、お合はゆるすと天の川の象のいをくわひ秋風
本引天の川をもとを換えただよたまはつうのせりとすりと
け引すそへ天の川の象の換えとく換えあますりとすりとすり。
お見け就ひ草十を齊々頭昭

秋りをすゆして天のゆめゆましれあらや詠
詞ハト・秋りを神よみてといへると其事。
ソレふす。秋りをもとゆましれあらや詠
うこきてとくきはく頬巾とハ三度の鼎のうちをもて衣の頬の
うちつけはくへふ影モリの料のゆもとわづき。書き人野
便われへれをやしめへば一二のうと文まわてね
けゑの比のあらじいすと大説をもとゆりとすと。

千五百番歌合、左近十時良年

父ナシヒ玉しゆせのゆるとくもあれ、
あを玉うるといふとく身をけり。あともどとこく
秋風といひ玉うちとくもあとふみがめうくと玉うら地ち
をよせらるにゆハ風のよう方をくき西をまめす。外のいてき
たる。五九秋風ハ翁をあき一きごきのとハ、外れ、秋をう
てきこ入やうむすかるとくらかはうはま。
あおやだをほこりもす。あきやなまくをくとく。

入道赤闕白太政ノ右大臣よ侍多附百首哥よ

万葉行かよ

俊成つ

ハトクや神ニミセセヨモレシル林のたがう

一二のうじ一ハ神のそなへシト
キ卷ておもむれ(す神の風をよぶ)

百首哥よ

式子の親王

春すきす露アリ不あむくもくと秋の感を
本歌傳遠山のふくわくとくわくの感秋の感尔
ナクヤマす。林のほむかくやとすすと、林
やかーとふきそむけのまばげ唐とれ。ま
あくくゆすくまくさうを、いよりりも今ハすき
よのくゆやかくわく。鳥極よくもと葉
林の感くわくと露アリ不あむくもくと秋の感
すじゆすむう本歌の物語を能くもあは
て林のはくをいふ間を本歌をもくとさせ

たるくあらゆる事本筋にしきふれぬやう
の心をすきは今ハトのすじがよがれもすじが
くわざとまつあらかわやむがまくまくまくまく
機政太政大臣家可首并

機政太政大臣家可首并

八條院六條

かくにあつて草をあらうともうか
人をもよねふをよそむか
まくすせんせんせんせんせんせんせんせん

か歌所歌今ま羽草花通先祖

かねとせせり山入森の路さきおう森のやた風

多喜

題一寺

慈因大僧正

才もあらわしを森の森にすてせし
まわの夕れを森の風のをれキアリ
まぐをば寄りそはる森の風へやて、
とある秋の夕し森の風のとくとて夕暮
うりや、
よがれの夕れをめぐらすとて、それもく森の風へ
の森のやくあるて、
いとす林といふがとちよばさす、
やくせなたく、
門で身をはさまと正子、
石を侵すとて立葉もじはせ風

百首歌

機政

秋の葉ふかくよりの林を待たむやの林上の方
林すうと木林のよしとすきめをとふまうこ
ーーす。やの林と巣ともいきのき、巣ハ林の巣よ
てきりきわむねむれど。一きのき、巣ハ林の巣よ
ほくまくわを。又みわやのつてふかくとばす。巣は
きをほくまよ。一きのきと。きくまく又は。此
きをほくまよのきくま。一きのきと。麻のうよけてゆ
ーーきくまのきくま。一きのきと。大さ
きくま。一きのきと。ふくま。一きのきと。大さ
きくま。一きのきと。ふくま。一きのきと。大さ
きのきと。ふくま。一きのきと。大さ
きのきと。ふくま。一きのきと。大さ
きのきと。ふくま。一きのきと。大さ
きのきと。ふくま。一きのきと。大さ
きのきと。ふくま。一きのきと。大さ

わがてかくのねくよねくよ林のうし

わがてハ、一きのきと。一きのきと。一きのきと。
教くよ。すおやくあわせじい月よ。林ハ、
林立くよ。林立くよ。林立くよ。林立くよ。林立くよ。
てめめの林とやる。林と、林と、林と、林と、林と、
林と、林と、林と、林と、林と、林と、林と、林と、
林と、林と、林と、林と、林と、林と、林と、林と、
一きのきと。一きのきと。一きのきと。一きのきと。一きのきと。

題一らう

アシモレシキ室の林をみゆけす。神のあ
ーのゆづき聞ます。ちきまくす。高めす。わぬ。尋ねのう
のう。わぬ。アシモレシキ室の林をみゆけす。神のあ
ーのゆづき聞ます。ちきまくす。高めす。わぬ。尋ねのう

秋のトソハシのわがまどとあるにあらず。それハソハソウルハ
けうるふをすむる。アーテキナヒタム。シテモアラ火たま
サヒシムモ。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス哥。
アーテトモアラス哥。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス
秋のタクシをみて。アーテトモアラス哥。

家の四首歌合

わやりとくらもや、神もくわきしくらか林の夕暮
あらわゆくわ人の神よくみくらもハ紅葉えげまつ、
のめくらはと。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス
西夕もあくさくわちもあきとあわ。いじりてゆくと同
とくを引きと同くとす。おもしろへかをそもとお景
とくを説く。おもとひきて説くが同ーをとおとくとす。も
すすまを二ねよとそかよひ附。ハジケテお歌

子ねときこよやく。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス
キ。アーテトモアラス哥。先共尊見。アーテトモアラス哥。不審。アーテトモアラス
す。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス
をのこし。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス
行ふふとを

慈因大傳

ミ山浦やいつわ林の木と木と木と木と木の夕暮の里
いづみの下ながら木と木と木と木と木と木と木と
の木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と
木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と
の木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と
の木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と
の木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と
度。秋風の神。秋風の神。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス
を行財のほそえと。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス
をれ。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス
古て叶歌のち。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス哥。アーテトモアラス

きつぎのをとすれどものを守てまじめよ。そよのじやうぢのを
かくすゆきこゆきかぬ古きを守るを守らすて禁をとる
开ちうと作せ
のろくすよえ

題一吟

寂蓮

はいさきのとくすすむの様立山れあきの夕れ
林立山はりゆゆすがれ秋のとくすもなき秋を立ち山はりゆゆす
やむむれ林のきらはひきのとくす。一そのかい様立山の林の夕れが林
さひりゆゆきのれれとて何ゆむ林のとくす
それがあれりさりとてふべきでふべきでふべき

西行

人年きしとすあひ年仰り鳴立山の林の夕れ

鳴立山

名すあす。

西行は跡すあひと百首歌す

定家荘ト

足疲せばたと家計をすりきの陣のを庭の林の夕れ
二三のゆきの春の御下りしるすとれのゆきゆきをあつ
あるふく春林のたまらのほらすとれ。そこにはとまら
さむれとまらすきふきとあらざるをあはりとすとてと
さむれとまらすきふきとあらざるをあはりとすとてと
上うけとまらすきふきとあらざるをあはりとすとて
たまよとまらすきふきとあらざるをあはりとすとて
林の夕れとまよとまらすきふきとあらざるをあはりとす
とてとてとまよとまらすきふきとあらざるをあはりとす

トもものすきぬくくをゆきめらうかりし磯山浦との接続へ
めづくを失ひたる愁り下にれどもが月華との夕景にて
のすきが分浦のすくもじまのすみがとくの浦の宮屋
の林の夕景を三波せんじらのすくもじてあむれをきりき
そとく俗ふと元もじぬうの原いしやとくの浦えきんじす
お門のすくもじれと浦の島屋秋の夕景といちあむれをはます
外よりみてあすくはまとせせ花もみ祭りとくの源義の丸
さゆのすくもじあすくはまとせせ花もみ祭りとくの源義の丸

五十首歌合附

雅經

じややさむじややさむじや、まし算作のよみの林の夕景

初々潤うてとのとぬく風と。潤うてとのとぬくのひま。
あるます。だら作自風を。上下に立くなむことなどと。
じややさむじややさむじや、まし算作のよみの林の夕景
神のせきりをとのとひ、ぐせんじくりをわらひときこ
そげ此もアヌラキナウ。ぐせんじくりをわらひときこ
えす。ぐせんじくりをわらひ。とひ本筋もありて。ゆくしゆく
はやす。すくへきと。本筋。すくへじくの筋。すく
せんじや。すくへきと。本筋。すくへじくの筋。すく
上下のソの夕景。ぐせんじくりをわらひ。林の夕景
のゆうすくきと。出でてあれから。ほくとせんじや。林の夕景。

林の哥と

宮内卿

すくへきと。本筋。すくへじくの筋。すく
上下のソの夕景。ぐせんじくりをわらひ。林の夕景
のゆうすくきと。出でてあれから。ほくとせんじや。林の夕景。

は風のうへ。とくに主歌うてはとまるとち。支のうをひ強
してきり。もろうをまうてきうす。されそくうをきへうふみ
そとふみ。きりもきこえなれ。とく一ツもかわ大き
さくらう。とくひたる奇。とく一ツもかわ大き
さくらう。とくひたる奇。とく一ツもかわ大き
さくらう。とくひたる奇。

鳴長明

秋風のうへ。神あやたあくの家のスケレ
右引よ。脊のうねあやたの里あやたのうけん。
え。いわゆる。神と仙づ。」
そ。秋風の神よ。まよひがきく。いもじの義と。たは
そ。いもじのあいだ。ほくはく。えくはく。はく。ドキ
ト。匂かくのあくつけて。三あく下。後のうへ。一そ
せ人の神。いわゆる。せ人の神。いわゆる。人間の
うへ。神。いわゆる。神のうへ。人間のうへ。神のうへ。

うね
うね

西行

あつあ秋はうまうめあれすまよめのうまく見
け。秋はうまうめのうまく見。まよめのうまく見
たまく見。上人の玉草をもんのうまく見。

式子内親王

まく首もわぬ秋風といふ。波す一つのをく巻
まく首もわぬ秋風といふ。波す一つのをく巻
まく首もわぬ秋風といふ。波す一つのをく巻
秋風のまく首もわぬ秋風といふ。波す一つのをく巻
あぬつと秋風のまく首もわぬ秋風といふ。波す一つのをく巻
あぬつと秋風のまく首もわぬ秋風といふ。波す一つのをく巻

おち小豆のしぐれあるあね林風も音もぬでりといふや品
さとてあをすましとく林風もそりしりうわなまそよしも
わぬ林風とつきたる緒句音とヒコ奈トリリの音を
浮遊するきこゆるをす。緒句音は上あらひよおとて一者
やあらはすも川の音流は上のあらひよおとて一者
やあらはすも川の音流は上のあらひよおとて一者
やあらはすも川の音流は上のあらひよおとて一者

千五百番歌合 通典

你あるのはとみ月しぐれとしすと一月の秋の林風
你あるのはとみ月を今もとみ月の秋の林風
さし又とけのまよとくや(足の月)けといはもとあはり
月のまよとくや(足の月)けといはもとあはり
とまよとくや(足の月)をとてうれとふ細いとせりはいと
りとまよとくや(足の月)をとてうれとふ細いとせりはいと
うせりとくまよとくや(足の月)けといと
うせりとくまよとくや(足の月)けといと

よもわす三かげへづけんぬとす。あはりとく林風とく
まよとくや(足の月)けといはもとあはり
まよとくや(足の月)けといはもとあはり

五十首歌合 河内向月

後成女

大あきれむの木の弓をひづけて今のもと林風の月
大あきれむふを木の弓のわきんよどりて二社の弓
あきれむふを木の弓のわきんよどりて二社の弓
へきやまゆきりとくぐだのまくち

身覺は親王家幸首歌とおと朝日

有月月まに鳥の神のとよ人ほめゆるものとよま
三四句と。神のとよ人ほめゆる月のとよ
かとうあゆうと。人のとよま

標改家百首寄今よ 有家りト

風ふる淺茅のあにほすわしはぬよしの福壽
やわらぎよハ、もとの清まとやうえほのうきをやとうかゆ。
車のやくよきいゆ。れふらあひだまねめくらゆ。
えすくものやくくちを橋あはるのうせきくらゆ。

水せ順と十を哥より一付

通光卿

じゆせやゆよ林のほそをなき、うる風のまよひし
よどとひりも、あら、林のそなきと、林の旅の風
はなをあつて、じゆせやのそなき事をうゆうひを
うよけり、またあらとそをき。トタ行りあいふ
りて旅照へとまち、一かくへりと。

木ノ下んといふこと。

百首歌より十月 慈惠人傳

いつまでも風すと月のみ秋行きて林をそよぎ
結句、ふるむよかれて、音の林をぬきこむすと
音。又林をましえて風よそよそして秋の月のや
うよそよなふ。秋のよそよる歌のよそよるとよそ
よそよそ。ばははと。そのよそよそよそよそよそよ
そよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそよ
そよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそよ

よそよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそよ

武子内親王

本歌いつくよ世をいふとしゆとすゆ山アシタカよ
かづきし初々月をもあよひるべからむを
りそよ。山の林の三ヶ月をもれと林のうかくはま
まつらむもむらく。すすよつけてうやうや、秋の月のすまぬ寄りる、
とねり。山の林の名うらね寄りるあいとねる。下弓
月をすまむの月をまわる月をまつむる新月祭。下弓
月をすまし。まよまよとわんと。一月のさは。
みて林よわぬ寄るあれりてまじと生アヒ。林よも山よ
内のすまむふくあよまくせんまくと。下弓山も山よハ世の
うはよ隠あわく。必嵯峨野芳野山。月すしとふハ。
ちくや山とすくい入るすれくわく。月すしとふハ。
林の月すしとすくいをまよひだひよひをと

うて弓弓月すしとすくいを。結負ひをと
よあひふ事をじいうめにゆく。上弓の弓
とせばのたまき。まんじゆてみたれハ。とつきのうい
キ。みはの弓。雄偉流麗豪壯。新奇よをとあたうと書
立と呼す。上弓のうれく。まくみ用をと。下弓のうれく。る
まく天骨す。接ひうれく。まくみ用をと。下弓のうれく。る
いふうと。氣既の及
もむのう。

題へら文

從三位賴政

とまくひくとくにとおう。うやの歎の月をと
月をとあくとすくい。じやるこまくめくとい
ふへまくたまくとく。うや。たまの月をまく。勧坐

月と山。山やあくしすよ。山も
お本。おつゝさすりておますは師のり。しよくね
へきりをめりゆる。右ゆの嶽。そも山よ。ときえん。おみの
風とひく隱のまこと。心のほきくしておきのむすよ
げてはハ。時代やあらうて。お前のがどもどく。まあ
アヒル。さうへられん。おもくある。のせれす。

わがまほの今まはなき月
おもて

木の内にものうちへ波のたまはる
本歌あそびあそびあはれの波のたまと
せんりう。

一
百首歌より
時林の歌
田大作正

頬
之
傳
成
女

種のとがひのうへぬまの相手で月あれど
やうくいの相手あらずれふうきくらうと
題へらと
傳成女
うれ秋あんな風月の村しきうゆとりかく
木歌ちややまけの、うきよへりむ窮りく。そえうの
月の桂。林ハれわら。そく。うきよの
がのくもる。うきよの木へ。世ニその古教ハシメ例へてし
ます。うきよの月の桂ハ淡よ。うきよの木。あすレ
うきよをあすレ。うきよの葉。あすレ。うきよの
はうきの木歌のうきよ。うきよを古歌をと。あすレ
うきよの木をうきよ。うきよをうきよ。
うえの秋の歌の常。うきよ。殊よほやうか月
をうきよ。うきよ。うきよ。うきよ。うきよ。

さんくまうきのまかの極のきよめ第トシマナリモトシのまよ
武田林えんすてをうりとくの風のうに紅波よそり
トシタケトウモカタタクれどあくとあくと上向ひとヨリの林ソシヒトモの
のうかくとくをたゞけまほのほがよそよそと雄勝とおとすよそ
事うわいをしきうとくをうじうじうじうじうじうじうじ
のぬあるを説廻はるといふ

在院御所

すみつめすす拂失ひゆ月のあとの間とけ生
月の外ハヒは月吉度のすとそんじやと月も
し節の事なうむとあづば印をしらき行。二・久葉小代
印と月吉をねむひやとほくやうかの拂きよ
きすがの月吉度のみの拂失ひゆとと種
じまぐのまく一きよて月吉度のみのまの馬く
まをまきまをまきまをまきまをまきまをま

辛酉秋月廿四日卯年

攝政

みのすよあれ小秋晴よりとみ度の月吉うふ
かわせ小秋、せとみすよあれやまうあるふ
かみそ朝、今きとをせりて月吉うふ
ととくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
氣をやす。あれとくは能役をもひもあたへてうやうや
大のうのをひひらす。せんじとあくとくとくとくとくと本

力哥をひくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
のうふのひくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
け歌むとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

うそか。ほのうのう音よきのぬはね、前まくさす。けはの歌。
かねはねハシナキ枝よまくを吹鳴するゆゑ、あくまく
の音よか。えりと歌ハ声す。のどより雄偉ちり。といひ
ましん。雄偉ちり。といひきやうト平んとすへらむの
聲をうねらむ。

歌ふす。之きえい。まうねれ代歌。歌
の歌は歌の昇を申す。もとめす。

かねはねを申す。かねはねす。

寛仁元年春歌今よ山家翁

は
あわが人ハ斗コラとせす。三山の刀。秋風をあく
は
あわが人ハ秋コラをあく。月を下し。全を出
は
あわが人をも。折ササガフをも。手をも。身をも。
あわが人をも。手をも。蛇足をも。身をも。
あわが人をも。手をも。蛇足をも。身をも。

事の外をも。手をも。身をも。蛇足をも。身をも。
事の外をも。手をも。身をも。蛇足をも。身をも。
事の外をも。手をも。身をも。蛇足をも。身をも。
事の外をも。手をも。身をも。蛇足をも。身をも。

八月十五夜和歌所歌今よ山家翁

ほしめ外山の庵のねえよけとみあるの月をひき
たふすのまことのたよのトヨクの病く佛きよとお尼を
ちり拂はうては行とのが行の尼拂はうては行の尼のあき
やあん大きの比の寺。殿様をもあすり玉をのりて、神の如く
めしむるやうすらし財風とて軒ぶるるうれしへを省き
す降詔とさうともも御かうりあるくよせす程さんと
のひだんをぬめりけとみよくのゆくととくとこ。うゑも
さうほきわらん。けとみよくのゆくととくのゆくととくと
してすしとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
衆中とまがハ波よおおよおおよおおよおおよおおよお
一と外山の庵のねえよ本宣月をも拂キよつてのととくと
あると、いとすがゆ下。よほうぬといひとお山の名の医ますとゆく
表のなきとをあつて。トタヌ木立とソシテ。此の临山のまをトヨ
ヘのくすやのあつ佐老の本之ハある深山の月を拂キよつての
ゆへうく看るよつて。ソリのく。そのまをわぬ外山の庵の林のねえのくきよおえゆ
ふのあうか月をも拂キよつて。先生の元のゆく

下句を外山の庵のまととて、されば深山月とよ。頃なく
夕拂きゆきとて、とて、御がす。すと、
すと、ハ、い、く。三の夕よの強たるを尼拂はうて、夕を、さとすとよ
いはづりたるとて、トキ山の幸としすくれとれとれ。
ゆきろげて、上方ともうつきよとすとく。三夕のトヨクの残
一撫。

月あらじ

密達

月の移すぬあらじはたのねをつぐて秋れどもとく

月の移すぬまのまとと。悉く残す秋風
吹きまよとねをつぐてあはし。門の風流すとすてやハ行の
ゆきろげて、上方ともうつきよとすとく。三夕のトヨクの残

すとくわゆあらじはたのねをつぐて秋れどもとく

長明

不就すもむらよやと此かれも傷弓舉
歌のままで月が成りしの月もあすせ中止まで
ても月をすらじあゆきまをひへ又くまた
近寄る本はくちゆことと下つハ山のゆくばりのふ
ふきごとのゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
こもかくはく峯のねれひがおひとのれのゆけ
そとへ一そのをハ世共一まで月をれと月をうへあくより
うすくまよくえ世の人のつき峰のねれうそと
声ひ下りのあがひうとふすうちあるき。

山月

秀能

里川の山河の岩のあのうへよなえぬやき月をえめ
簇森の山のうへよなえぬやき月をえめせり。

八月夜和歌は歌合よあき秋月

宣ひて

やうあらうすけは聲のたゞと秋月すれとハねしわめり
月すれとゆれとゆれとわくはれと月のやうにれと
さうすくあらはすよまゆと
月はそれとゆれとわくはれとあらはすよまゆと
新やうてあらはすよまゆと

宜林院丹後

志^シを緋波の林のとれまくと浦^{シマカ}とし力^{ヒカ}ハ^ハみとし
三ちやうの月^{ムツ}とくとくと月^{ムツ}とくあるな^ハ月^{ムツ}
て下ちる月^{ムツ}とくとくと月^{ムツ}とくあるな^ハ月^{ムツ}
月^{ムツ}とくとくと月^{ムツ}とくとくと月^{ムツ}とくとくと月^{ムツ}
うくせきとくとくと月^{ムツ}とくとくと月^{ムツ}とくとくと月^{ムツ}

かくでらうへ。一三の木六ばなりへの浦とす。月をもるよしと音波
の浦の木のものちむれかひきハスミル。

長明

江すやまくしゆの秋の神内はぬやく、すくのま、
月の神やすくわゆるのすくいのまうとおりとされ
のまうすにゆくし奪の神やすくりと。

興一らと

七條院人納言

かくもじむくう崎のあま衣波と月とよひ到く
彼ノ一されだる神と方々うつ
お月と一きくちゆ。

秋雲空はあを月夜露納言

ゆき邊きあとて汗よりおのまゆがりの奪の
月とトシとてまゆがりのと。流す。ニセ白い
けのまゆがりするますから。いがけのまゆがりはよ
くうするつきをねく。時々まゆがり。せう無事
へく。ヒトクウアよとまゆとんよ。候をもとしき。

題一等

通因傳

さきおみをしるしむのまゆもとゆの秋夜の
さきおみをしるしむのまゆもとゆの秋夜の月夜
もとゆをがしるゆとゆとす。

通光鵠

高山すむあむのまゆもとゆと秋夜の月夜
三々。まゆはえねとゆる本ひくとそ。三々。ねをす
そと。上ゆら

うやく又そとひふりあがひだり。一うちを先とすうて、あねのま
くかるときじて世上にいとせんをふるむのぐれはるもみれ
とよくもおほの方のいじき言ふをもと
け筋がよし。かくしてけら半ばとひて骨を勧しが歌立山仙
うりうちでなれしにちあく月もあり山すゝはづくの山す
くまーなりて立山と。——うく汝は峯のまゝわ月とを
よみたるゆゑか。——うく汝は峯のまゝわ月とを

立山と西のすあしとトをあわせがく。——自の寺と室
東西鬼北の論。——ものと人並の長ひよも雪の立山
ことと不用か。——ものと人並の長ひよも雪の立山
やあは流のうのをうの門とすうとあうとありて白毫
の立山のゆきあしとし。——さよはうとぎとくとくとくとく
ソレの山すくとむなを。——此文を傳へま。——一首の立山の月
立山の月と。——うきよはうはうきよ。——
とも不曉のゆきあらうか。——古今序とく

ひきよは方紫の舟をだりと。——古の序入とおもふと
そよわすとせる伝接ゆきすうなきひいて。——入とおもふと
よも雪のうるわせよ。——上不用え。是より來て發とく筆など
き。——とけ筆の心も拂ふ。——立山の月と。——うきよはう
り物すらぬあるある。——立山の月と。——うきよはう
すと先あと次の次なるを。——とくとくとくとくとくと
アーモド。——立山の月と。——うきよはうはうきよ。——
立ちき。——立山の月と。——うきよはうはうきよ。——
それで。——立山の月と。——立山の月と。——うきよはう
うきよはうも雪のうのけり。——うきよはうはう

般若院大輔

すうめつねりふめく。秋の事よみし林夜のと
せりふと。——老ぬるをぞく。
きやはんがく。——く

式子内親王

西月のましにても愁ぬき日なり、山傍らうきわハヤハヤ
三々々ハモシキアリて空そねとくやの月を、
とふきあひ下々山傍をくさへきて、情きわ景
せりとば、あまやうす月をうちのまたえ
すてねむるよ。今く山傍をくさへて、情きわ景
せりとば、あまやうす月をうち、キモ

かきまくられをちりりれ是ひ、川林のを
かみいきよるを、背にけりよひ、うせテアリ、下りる
とお月のキタも、ゆのへれど、かきまくられを、
せりとばをも、上へかうしてきくは
ノリとふきあひ、そつづくをもねをた、キモ

トヨヒタチがたかく、一首のうハ秋の月をかうすもやサセを
して、よのまよりめ
まくわうじよとす。

五十音歌事より附 摂政

雲あはは八葉から秋をねば残て月をか
けらひきまを残すて、この葉のさやきをう
ち風を残すとまくらへ、この不用入えり
よの用こよ風を残すとまくらへ、この月の
すみりき料へ、半朮秋のさやきは、この月の
おもてへ、葉風をさくらんとすと
つ時うる夜の月をもすと。

家の月半首よ

月半首よちくあくま秋夜のまろよ、うねの風

月たゞめくはやきと秋の夜、月をもよろて
うす情をりよかでなくあしよきとれはあら
へよび入のまゆ。けぬのとく。さのき。月のうすよ
情よれむて。とくとくあらき。秋の夜す。おまくと
ときよしきと。

定家納ト

はせうや待夜の秋のれすて月をくじの傍野
本歌。きり延よ衣くさき。うらやまをね
ひやうはあぢれら。年をふねかくしてひく。物々や
墙やまの山かとよやう。よそれな歌詠あり。やうるのを。五
月雨をねむれ。はまゆはまゆはまゆはまゆはまゆ
まちだる音をとらんの字を。又月のあべらの四
聲。てはととつひき。

あまや。例ち。けりき事あり。秋の後月とる。も
多もたらでまく。ぬあすと。ほそりの英雄の。
このもよのまよ。むかは。お傳。す小よ。や。又けし。そや
とく。おだり。せのあや。歌詠。はや。そく。よ。い。や
く。うり。そ。ま。う。う。き。こ。ん。す。や。の。や。ち。キ。を。う。き。洋。詳。試
人の。ま。じ。と。う。よ。ま。け。ね。の。月。を。う。き。て。更。ゆ
前やしの。場外。を。あ。ま。す。み。く。二。夕。向。か。り。と
却て。か。か。う。う。や。う。の。後。那
と。秀。う。う。が。た。ま。の。那。ま。

五十首寄多うるに野徑月

標政

りあで度。い。の。或。も。せ。よ。お。の。る。わ。も。月。教

上方に木山をきる室と仰とうきてるゆえ。この
はて京とハ月を山より見るの見入れど。
草の原より月が山に下りてアリきへども、か
らかくもあきゆきす。

又後月

宝印

月をむけりんわ村の曉ゆ雲の東のほと人
ニ、白きやさんのかなはて村のしりりと
ひる。そぞと月をもとをゆれり。そのきは
まことにすらすら。ありはきのや
人月をまきまくやあんとす。

題一と

通具

秋のあさむる月とあさり袖は吹くと秋の
風

三月のうて。夕をもよ。夜の風のくじか
きくと急袖よ風のくじか。急袖と月の
やまと。秋のくじか。急袖と月のくじか
くじか。寒よ春のあを袖よ吹くと月のくじか。

源家長

木のくじのふるむ。急袖と月のくじか
きくと急袖よ風のくじか。急袖と月の
やまと。秋のくじか。急袖と月のくじか
くじか。寒よ春のあを袖よ吹くと月のくじか。

元久元年八月十五夜和歌所と田家見月

前を改大口

風まゝ山田の庵をむく月や月をまよひすら水をむく

風まゝ下ま水とまん料を下す山田の庵をむく月が
不ぞまよ水のひすらすまよすんとすり

和歌乃お今よ國家月急家大傳ふ

月のちよみのよみにまほすすわぬむ庵と月をむく
二夕にしよすすますりていつく。まくつとまくはめといく。
一夕ま金石の響あり。仰てまきほの折あらきをまくは調あり
んまをぬまくすたよどうく。乍てまきほ三にまくまうたんと傳
あれ。かののひを例へてまくの折あら歌もとてまくとく。今とよ
ひきぢうききをばく、端くらまじく。何一段の風をす。暮すき体素ニ泥
じのこそ不自在をあとこまくまく。小田よりをえのそくをれとく
をまくまく。下がへトタコ居る家の庵とちの庵をまくまく。下
田の庵をすまうのめいたすキれど何のうきまくうあん。ほてていがのう
まくまくまくのうきまくがたれどわねやとりひく。うけとみれとみれ
せりふ。がぬれどもれれぬれどもれす。のあく
覚ましぬ。そ残の夜を眠らす。月をまくまくまく。

後成女

緇葉

緇葉あと風まよすすてまし庵と月をまよすかうあり
橋奈々風のたまよく吹ぬる奈奈子はまよせきて。
かくのやわゆるてまくらむかしむとまく
のまよるてまくらむかしむかしむとまく
あくと月のすきまよすすてまし庵と
は風のうくまく。まよすすむとまくとまくとまくとまくとまくとまく
まよすすむとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
まよすすむとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
まよすすむとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
まよすすむとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

郢

かくしてゆねやのやのつかまて月よけとね床のまよ延
月よく月かまつ（そのと月よもんてどもまよいとねが床のまよ
月よく月かまつ）
百千奇あり 枝の舞式子ゆれ

林のまよ方さきまよくまようれり月の月新
上りく。蘇るやうのたよりをみるがくはる月の
はやまよひすりて。まだうするうけてすきの化り
月のあらわす。林のまよ色ほととぎす。
花のまよかにふむれりうるる月のうるる
花のまよのゆく

太上天室はも

女のかやだかにいとまかんせきやあすくも月の
のあすくも

長きやあすく終夜たのまよもくまで。

千首番歌令 通光師

あそぶやく残なゆくわづ月づかき林のよた室
とやをあそぶ。けくえ葉うなづ月生むよ。お
のあすくも。月づまくと残ゆふ。夜のあすくと青
小叶くもよ。

通光寺家歌合晩月二條院遺稿

今宵枝のまよかく、又下う神よあらひ月
大のまよかく世のまよふきす。まよくも。我く
袖のまよくとぞくとぞくとぞくとぞくとぞく

せかくすゞのやうに見るふうをいはりとて下せ。一そく
じてかをすすむと、神のゆききを。一そくハ世と一統。おもむ
かかくえはまでやくてもあらず。もとめくわくハちの月
わきよちの月ハ、いざるをあらず。

平首歌より時 雅經

けひねほこそあのかくやる月の神のせきふ
二三のてまく普通とてひえときやすれしゆ
矣。ちの玉の浦よみくらべとひよちの
れんじくふきを。二月のとく初々御事御神事
もと。四月の春よみくらべと。月を下よせらとてこども
まく。四月の春よみくらべと。月を下よせらとてこども
まく。四月の春よみくらべと。月を下よせらとてこども

夕せよと神事ばとひよそと。ばかと。五をみと
やうよみくらべと。すりとまくとてくれと。がく神のせききの内の
やうよみくらべと。別よせきと。やうよみくらべと。やう
やめをと。少くと。あらがくし。まのじ。あるはと。五の神のせ
きく。くの教をうねきと。迷懐のまへてくと。入神をく。迷懐
のまへたと。何とく他月の事とて。せきと。ふりと。まへ
か。おき舟とも。おうち奥ある。あく。迷場と。者とすと。そのま
ばかと。おとくと。おとくと。おとくと。おとくと。

